佳作

一日の大切さ

青森県青森市立古川中学校
三年　山田翔太

今から三年前、私は人生において、大きな体験をした。それは、私に一日の大切さを教えてくれた。

私の祖父は面白い。冗談を言って皆を笑わせたり、酔って帰ってきては、家族を困らせたりしていた。また、家族の象徴でもあった。一人で会社を立ち上げて社員をまとめ、とても頼もしい存在だった。

私が雪かきを好きになったのは祖父のおかげだ。小学校低学年から、大きいプラスチックのスコップを使って、一生懸命祖父の手伝いをした。毎日、両腕が筋肉痛になるほどだった。そうして何年もやっているうちに、雪かきが好きになり、部活終わりでヘトヘトでも、雪かきだけは毎日やっていた。

祖父から教わったものは、これまでの私の人生をとても良いものにしてくれた。

小学六年生の夏の終わり頃、私が家の二階でテレビを見ていると、洗面所の方から、祖母と祖父の会話が聞こえてきた。

「お父さん、大丈夫なの」

「なにこのぐらい大丈夫だね」

「いや救急車呼ぼう」

と、今までになくあせる祖母の声が聞こえた。祖父が吐血してしまっていたのだ。その後、祖父は救急車で市民病院に搬送された。

私は、とても驚き、同時に不安になった。数日後、父が祖父の病名を教えてくれた。それは、骨髄異形成症候群というもので、血が作られなくなる病気だと、分かりやすく説明してくれた。細かいことは分からなかったが、その漢字が八つも並ぶ病気は、とても恐ろしく感じられた。そして、この頃から「もしかして、重い病気なんじゃないのか。おじいちゃんが、おじいちゃんが…いやだ」と、思うようになっていた。それでも、祖父が入院中に外泊で家に帰ってくると、とても元気そうで安心した。

そんな日が何か月か続き、季節も冬になった。小学六年生になった私は、放課後の部活動が終わり、生徒玄関に向かった。すると、そこにはなぜか父がいた。

「おじいちゃんの体調が良くない」

と一言言われ、とても不安になった。病室に入ると、そこには痩せて弱々しくなった祖父がいた。しかし、あまりの変わりように驚いた私は、声をかけることすらできず、ただ手を強く握ることしかできなかった。

火曜日の朝、二〇一五年十一月十七日、私はいつもより早い時間に起こされた。眠たそうに目をこすると、そこには黒い礼服を着た母がいた。

「翔ちゃん、おじいちゃんに会いにいこう」

母の涙ぐんだ目とその一言で、私は全てを理解した。ゆっくり階段を降り、二階の畳の部屋を見ると、そこには白い布をかぶせられ、冷たくなった祖父がいた。私は、涙と嗚咽が止まらず、うずくまって動けなくなってしまった。とても悲しかった。祖父との思い出を粉々に砕かれたような気持ちだった。皆つらい気持ちの中、一番悲しんでいた私を慰めてくれた。兄は私に、「そんなに泣いていたらおじいちゃんも悲しくなっちゃうだろうから、おじいちゃんが生きられなかった分、俺たちが頑張るんだよ」と言ってくれた。一番つらいはずの祖母は、全く悲しむ姿を見せなかった。祖母は、まるでそこに祖父がいるかのように、遺影の前にご飯や祖父の好きな日本酒を置いたり、相撲や「笑点」が始まる時は必ずテレビを前に置いていた。祖母は私にこう教えてくれた。

「おじいちゃんは、亡くなったわけではないんだよ。おじいちゃんは家族一人一人の心の中にいて、見守ってくれているんだよ」

心に響いた言葉だった。祖母のおかげで前に踏み出せそうな気がした。

とても暗い話だったが、この経験によって私の祖父のように、人はいつ亡くなるか分からないから、その日その日をかけがえのない一日と考えるか、あたり前のように過ぎるものだと思うかで、これからの人生は変わると思った。祖父の死から学んだことを受け、私は私にできることを探し、毎朝学校の雪かきを頑張り続けた。兄との約束を果たすために係の日でなくてもやり続けた。心の中の祖父は、人生において全ては一度きりだということを私たちに教えてくれたのだと思う。

そして、二月二十五日の全校朝会で、私の頑張りが認められ、校長先生から感謝状をいただいた。兄も、県立高校に合格した。約束を果たすことができて、とても嬉しかった。

家の一階の事務所にある、祖父の大きな額縁に入っているたくさんの感謝状の中に、私の小さな感謝状が飾られた。